

現代日本
文學全集

[40]

伊長高

藤濱

左

虛

節

子夫

集集集



伊藤左千夫集
長塚節集
高濱虛子集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和五年五月十日印刷
昭和五年五月十三日發行

現代日本文學全集 第四十篇

著 作 者

伊 長 高
藤 塚 左 千
濱 虛
子 節 夫

發 行 者

山 本 美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印 刷 者

杉 山 愛 二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發 兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四〇番地

改 造 社

振替東京八四〇
電話芝(43)
四三二一二
番番番番番

「左千夫・節・虚子集」目次

伊藤左千夫集

卷頭寫眞（照影・筆蹟）

序

野の菊の墓……………四

隣のの嫁……………五

春の潮……………六

老の獣醫……………七

水の籠……………八

大雨の前日……………九

水の害雑録……………九

柿の本入磨論……………九

短歌……………一〇三

（附）戀の籬、冬林（四） 花と煙（二） 自作自評（六六）

「奥の細道」〔九七〕

年譜……………一〇九

長塚節集

卷頭寫眞（照影・筆蹟）

序

芋掘り……………一二三

開業醫……………一二

おふさ……………一七

教師……………一六

隣の室の客……………一八

太十と其犬……………二〇六

炭焼のむすめ……………二八

佐渡が島……………三四

菜の花……………三五

鍼の如く……………二四三

（附）即景、晩春雜詠（三三） 早春の歌、初秋の歌（五六）

秋雜詠（六三） 雜詠（八二） 濃霧の歌（一〇五） 雲の峰、晩

秋雜詠（二七） 房州行（三三） 暮春の歌（三四） 雜歌（四一）

俳句（二五）

年譜……………二五三

高濱虚子集

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)

落葉降る下にて

風流 懺法

横河

一 力

斑鳩 物語

俳諧 師

續俳諧 師

朝鮮 師

柿二 師

第一回 柿二

第二回 柿二

第三回 野

第四回 K

第五回 共

第六回 途

第五回 途

二五八

三七

二六六

二六六

二六九

二七五

二八三

二八三

三八三

五〇一

五〇一

五〇一

五〇一

五〇一

五〇一

五〇一

五〇一

五〇一

第七回 釣鐘

第八回 鹽鴨

第九回 病氣

第十回 又柿の頃

第十一回 ガラス障子

第十二回 衰弱

第十三回 癩癩

第十四回 興津問題

第十五回 命

第十六回 命

第十七回 小葛

第十八回 介抱

第十九回 百花繪卷物

第二十回 死

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

五八

五三

五七

五二

五七

五一

五六

六一

五七

五〇

五五

五九

五八

五八

五八

五八

五八

五八

五八

五八

五八

五八

伊藤左千夫集

序

左千夫は一面純情の抒情詩人であるが、一面好んでよく議論した。多數の抒情詩歌と共に後來の短歌を示唆した歌論を残したのである。左千夫の議論好きはその生來であらう。則ち年少にして太政官への建白書を書いたりして居る。左千夫の一生を彼の如くあらしめた正岡子規との交渉もその議論が機縁となつて居る。明治三十一年左千夫は新聞「日本」に「新自讃歌論」なるものを投じて居る。此は子規の眼にも入つたものと見えて、子規は『三たび歌よみに與ふる書』中にその説を引いて駁し、又『人々に答ふ』中に更に詳細に批判を加へて居る。間隙の多い左千夫の論陣は、明快整然なる子規の理論の鋭鋒によつて粉碎し盡されたかの觀がある。然し左千夫には全身を論敵子規に傾倒し師事してゆく純情が存して居た。否、左千夫の議論は既に理論ではない。そこに左千夫の作家としての本領が存するのである。左千夫が作品の價値は此の純情に發して居るのである。左千夫の處女作小説『野菊の墓』の如きも、技巧に幼稚な所のあるが、此の作者の純情が人を動かして止まないものである。

左千夫の小説に於ける技巧は無論子規の寫生文から發して居る。それは短歌が子規の寫實的傾向に負つて居るのと全く同じである。が、その奥底にはいつも作者の純情が燃えて居ることも短歌に於けると同じである。

左千夫は小説家としては國木田獨歩を好み、長谷川二葉亭、木下尚江、ゴリキーを愛讀して居た。然しこれは左千夫が自然主義作家の聲に倣つて居たためとはいへない。生來の主情的傾向が然らしたものであらう。明治四十一年一月「馬酔木」終刊號に自ら其の五年間の業績を顧みて「作歌理想は子規子時代と頗る其の中心を異にし（略中）其の態度は自ら人生を親しみ自然を傍觀するに至れり」と述べて居るのは左千夫の作品を知るには重要な意義ある言葉である。であるから左千夫の小説は多くは作者直接の経験であつて、作者は大抵主人公として扱はれて居る。主人公の作者自身から離れることの甚だ遠いもの、例へば「老」醫「篤」提灯の繪を書く女「等」になると作者の本領から外れたといふ感がなきを得ないのである。作者の此の直接の経験を取扱つたものと年々に變化して居る。『野菊の墓』に於ける素朴な境地から、『濱菊』『紅黄錄』の如きものを經て『余々子』去

年」となり、『水書雜錄』となり、作者の心境の敘述は痛切でありながら淡々たる表現を得るまでには及んで居る。其の他多くの作品例へば「隣」の嫁「春の潮」分家「胡顏子」等は此の兩者の中間に位するのであらう。又「新萬葉物語」「古代の少女」の如きものがあるが、これは寧ろ古歌玩賞の副産物と見ればよいのである。

左千夫の小説は勿論その歌の如く完成されたものとは言へぬ。殊に寫生文から入つた寫實的の技巧と、その主情的の人生觀とはまだしつくりと歩調を合せて居ない。加ふるに左千夫の世俗的常識的一面が少しく多辯に傾いて居る點では甚だ當代小説の行き方とそぐはないものがあつた。然しながらさういふ缺點だけを見て此の曇れる玉を捨てることが出来ぬ。短歌はその形式からして是の如き曇を被る間隙が少いために、短歌に於ては左千夫の美點は十分に發揮されて居るのである。小説に於て短歌の達した所まで達して居ないのはただ技巧の方面である。けれど同じく寫生文より出發して小説を書いても、長塚節の作品などと比べて、其所に明に作者の個性の相違を發揮して居る點は見のがせないものである。

昭和五年四月

土屋文明

野 菊 の 墓

後の月といふ時分が来ると、どうも思はずには居られない。幼い譯とは思ふが何分にも忘れることが出来ない。最は十年餘も過去つた昔のことであるから、細かい事實は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今朝昨日の如く、其時の事を考へると、全く當時の心持に立ち返つて、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありといふやうな状態で、忘れようと思ふ事もないではないが、寧ろ繰返し繰返し、考へては、夢幻的の興味を食つて居る事が多い、そんな譯から一寸物に書いて置かうかといふ氣になつたのである。

僕の家といふは、松戸から二里許り下つて、矢切の渡を東へ渡り、小高い岡の上で矢張矢切村と云つて居る所。矢切の齋藤と云へば、此界隈での舊家で、里見の崩れが二三人茲へ落ちて百姓になつた内の一人が齋藤と云つたのだと祖父から聞いて居る。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るやうな椎の樹が四五本重なり合つて立つて居る。村一番の森で村ぢうから羨ましが

られて居る。昔から何程暴風が吹いても、此椎森のために、僕の家許りは家根を割がれた事は只の一度もないとの話だ。家なども随分と古い、柱が残りず椎の木だ。それが又煤やら垢やらで何の木か見別けがつかぬ位、奥の間の最も煙に遠いところで、天井板が丸で油炭で塗つた様に、板の木目も判らぬ程黒い。それでも建ちは割合に高くて、簡単な欄間もあり銅の釘隠しなども打つてある。其釘隠しが馬鹿に大きい雁であつた。勿論一寸見たのでは木か金かも知れないほど古びてゐる。

僕の母なども先祖の言ひ傳だからといつて、此戦國時代の遺物的古家を、大へんに自慢されてゐた。其頃母は血の道で久しく煩つて居られ、黒塗的な奥の間がいつも母の病褥となつて居た。其次の十疊の間の南隅に、二疊の小座敷がある。僕が居ない時は機織場で、僕が居る内は僕の讀書室にしてゐた。手摺窓の障子を明けて頭を出すと、椎の枝が青空を遮つて北を掩うてゐる。

母が永らくぶら／＼して居たから、市川の親類で僕には縁の從妹になつて居る、民子といふ女の兒が仕事の手傳やら母の看護やらに來て居つた。僕が今忘れることが出来ないといふのは、其民子と僕との關係である。其關係と云つても、僕は民子と下劣な關係をしたのではない。

僕は小学校を卒業した許りで十五歳、月を數へると十三歳何ヶ月といふ頃、民子は十七だけれどそれも生れが晚いから、十五と少しにしかならない。瘦きすであつたけれども顔は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚に紅味をおんだ、誠に光澤の好い兒であつた。いつでも活々として元氣がよく、其癖氣は弱くて憎氣の少しもない兒であつた。

勿論僕とは大の仲好しで、座敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたくと云つては僕の座敷へ這入つてくる、私も本が讀みたいの習慣がしたいのと云ふ、たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば來い來いと云うて二人で遊ぶのが何より面白かつた。母からいつでも叱られる、

「又民子は政の所へ這入つて居るナ。コラアさつ

さと掃除をやつてしまへ。これからは政の讀書の邪魔などしてはいけません。民や年上の癖に……」

などと頻りに小言を云ふけれど、其實母も民子をば非常に可愛がつて居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……などと時々民子はだゝをいふ。さういふ時の母の小言も極つてゐる。

「お前は手習よか裁縫です。着物が満足に縫へなくて女一人前として嫁にゆかれません」

此頃僕に一點の邪念が無かつたは勿論であれど、民子の方にも、いやな考などは少しも無かつたに相違ない。併し母が能く小言を云ふにも拘らず、民子は猶朝の御飯だ晝の御飯だというては僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入つて来て、本を見せるの筆を借せると云つては暫く遊んでゐる。其間にも母の藥を持つてきた歸りや、母の用を達した歸りには、屹度僕の所へ這入つてくる。僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思はれた。今日民子は何をしてゐるかなと思ひ出すと、ふらふらツと書室を出る。民子を見にゆくといふほどの心ではないが、一寸民子の姿が目につれば氣が落着くのであつた。何のこつた矢張り

民子を見に來たんぢやないかと、自分で自分を嘲つた様なことが屢々あつたのである。

村の或家さ替女がとまつたから聴きにゆかないか、祭文がきたから聴きに行かうのと近所の女共が誘うても、民子は何か斷りを云うて決して家を出ない。隣村の祭で花火や飾物があるからとの事で、例の向うのお濱や隣のお仙等が大騒ぎして見にゆくといふに、内ものもらまで民さんも一所に行つて見てきたらと云うても、民子は母の病氣を言ひ前にして行かない。僕も餘りそんな所へ出るは厭であつたから家に居る。民子は狐鼠々々と僕の所へ這入つてきて、小聲で、私は内に居るのが一番面白いわと云つてニツコリ笑ふ。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかつた。

僕が三日置き四日置きに母の藥を取りに松戸へゆく。どうかすると歸りが晩くなる。民子は三度も四度も裏坂の上まで出て渡しの方を見てゐたさうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は眞面目になつて、お母さんが心配して、見てお出で見てお出でいふからだと云ひ譯をする。家の者は皆ひそく笑つてゐるとの話であつた。

さういふ次第だから、作をんなのお増などは、

「無上と民子を小面憎がつて、何かといふと、民子さんは政夫さんとこへ許り行きたがる、陳さへあれば政夫さんにこびりついてゐる」

などと頻りに云ひはやしたらしく、隣のお仙や向うのお濱等まで彼是噂をする。これを聞いてか、娘が母に注意したらしく、或日母は常になく六つかしい顔をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味有り氣な小言を云うた、

「男も女も十五六になれば最早兒供ではない。お前等二人が餘り仲が好過ぎるとて人が彼は云ふさうぢや。氣をつけなくてはいけない。民子が年かきの癖によくない。是からはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。吾子を許すではないが政は未だ兒供だ。民や十七ではないか。つまらぬ噂をされるとお前の體に疵がつく。政夫だつて氣をつける……來月から千葉の中學へ行くんぢやないか」

民子は年が多いし且は意味あつて僕の所へゆくであらうと思はれたと氣がついたか、非常に愧ぢ入つた様子に、潮眞亦にして俯向いてゐる。常は母に少し小言云はれても随分だゝをいふのだけれど、此日は只兩手をついて俯向いたきり一言もいはない。何の疚しい所のない僕は頗る不平で、

「お母さんそりや餘り御無理です。人が何と云つたつて、私等は何の譯もないのに、何か大變悪いことでもした様なお小言ぢやありませんか。お母さんだつていつもさう云つてぢやありませんか。民子とお前とは兄弟も同じだ、お母さんの眼からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつても云つたぢやありませんか」

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんないやらしいことを云はれようとは少しも思つて居なかつたから、僕の不平もいくらかの理はある。母は俄にやさしくなつて、

「お前達に何の譯もないことはお母さんも知つてゐるが、人の口がうるさいから、只これから少し氣をつけてと云ふのです」

色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を眞から可愛がる笑が湛へて居る。やがて、

「民やはあの又傘を持つてきて、それから縫掛けの袷を今日中に仕上げてしまひなさい……。政は立つた次手に花を剪つて佛壇へ挿げて下さい。菊はまだ咲かないか、そんなら紫菀でも切つてくれよ」

本人達は何の氣なしであるのに、人が彼等は云ふので却て無邪氣でゐられない様にして終ふ。

僕は母の小言も一日しか覚えてゐない。二三日たつて民さんはなぜ近頃は來ないのかしらんと思つた位であつたけれど、民子の方では、それからといふものは様子がからつと變つて終つた。

民子は其後僕の所へは一切顔出ししない許りでなく、座敷の内で行違つても、人のゐる前などでは容易に物も云はない、何となく極りわるさうに、まぶしい様な風で急いで通り過ぎて終ふ。據處なく物を云ふにも、今までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改まつて口をきくのである。時には僕が餘り俄に改まつたのを可笑しがつて笑へば、民子も遂には袖で笑ひを隠して逃げて終ふといふ風で、兎に角一重の垣が二人の間に結ばれた様な氣合になつた。

それでも或日の四時過ぎに、母の云ひついで僕が背戸の茄子畑に茄子をもいで居ると、いつのまにか民子が箆を手に持つて、僕の後にきてゐた。

「政太さん……」
出し抜けに呼んで笑つてゐる。

「私もお母さんから云ひつかつて來たのよ。今日の縫物は肩が凝つたらう、少し休みながら茄子をもいできてくれ、明日麵漬をつけるから

つて、お母さんがさう云ふから、私飛んできました」

民子は非常に嬉しうに元氣一パイで、僕が、

「それでは僕が先にきてゐるのを民さんは知らないで來たの」

と云ふと民子は、

「知らなくてサ」

にこ／＼しながら茄子を採り始める。茄子畑といふは、椎森の下から一重の敷を通り抜けて、家より西北に當る裏の千菜畑。崖の上になつてゐるので、利根川は勿論中川までもかすかに見え、武藏一畝んが見渡される。秩父か足柄箱根の山々富士の高峯も見える。東京の上野の森だと云ふのもそれらしく見える。水のやうに澄みきつた秋の空、日は一間半許りの邊に傾いて、僕等二人が立つて居る茄子畑を正面に照り返して居る。あたり一體にシンとして又如何にもハッキリとした景色。吾等二人は眞に畫中の人である。

「マア何といふ好い景色でせう」

民子も暫く手をやめて立つた。

僕は茲で白狀するが、此時の僕は遽に十日以前前の僕ではなかつた。二人は決して此時無邪氣

な友達ではなかつた。いつの間にかさういふ心持が起つて居たか、自分には少しも判らなかつたが、矢張り母に叱られた頃から、僕の胸の中にも小さな戀の卵が幾個か湧きそめて居つたに違ひない。僕の精神状態がいつの間にか變化してきたは、隠すことの出来ない事實である。此日初めて民子を女として思つたのが、僕に邪念の萌芽ありし何よりの證據ぢや。

民子が體をくの字にかがめて、茄子をもぎつつある其横顔を見て今更のやうに民子の美しく可愛らしさに氣がついた。これまでにも可愛らしいと思はぬことはなかつたが、今日はいみじみと其美しさが身にしみた。しなやかに光澤のある鬢の毛につつまれた耳たぼ、豊かな頬の白く鮮かな、顎のくしめの愛らしさ、顎のあたり如何にも清げなる、藤色の半襟や花染の襷や、それらが悉く優美に眼にとまつた。さうなると恐ろしいもので、物を云ふにも思ひ切つた言は云へなくなる、羞しくなる、極りが悪くなる、皆例の卵の作用から起ることであらう。

茲十日許仲垣の隔で出来て、ロク／＼話もせなかつたから、これも今までは無論そんな事考へもせぬに極つて居るが、今日は茲で何か話さねばならぬ様な氣がした。僕は初め無造

作に民さんと呼んだけれど、跡は無造作に詞が繼がない。をかし喉がつかまつて聲が出ない。民子は茄子をひとつ手に持ちながら體を起し、「政夫さん、何に……」

「何でもないけど民さんは近頃へんだからさ。

僕なんかすつかり嫌ひになつたやうだもの」

民子はさすがに女性で、さういふ事には僕などより遙に神經が鋭敏になつてゐる。さも口惜しうな顔して、つと僕の側へ寄つてきた。

「政夫さんはあんまりだわ。私がいつ政夫さんに隔てをしました……」

「何さ、此頃民さんは、すつかり變つちまつて、僕なんかには用はないらしいからよ。それだつて民さんに不足を云ふ譯ではないよ」

民子はせきこんで、

「そんな事いふはそりや政夫さんひどいわ、御無理だわ。此間は二人を並べて置いて、お母さんにあんなに叱られたぢやありませんか。あなた

は男ですから平氣でおいでだけど、私は年

が多いし女ですもの、あア云はれては實に面目

がないぢやありませんか。それでですから、私は

一生懸命になつてたしなんで居るんです。そ

れを政夫さん隔てるの厭になつたらうのと云ふ

んだもの、私はほんとにつまらない……」

民子は泣き出しさうな顔つきで僕の顔をちいッとしてゐる。僕は只話の小口にさう云うたまでであるから、民子に泣きさうになられては、はいさうに氣の毒になつて、

「僕は腹を立つて言つたでは無いのに、民さんは腹を立つたの……僕は只民さんが俄に變つて

逢つても口もきかず、遊びにも来ないから、い

やに淋しく悲しくなつちまつたのさ。それだから

これからも時々遊びにお出でよ。お母さんに

叱られたら僕が咎を背負ふから……人が何と

云つたつてよいぢやないか」

何というても兎僕だけに無茶なことをいふ。

無茶なことを云はれて民子は心配やら嬉しいや

ら、嬉しいやら心配やら、心配と嬉しいとが胸の

中で、ごつたになつて争うたけれど、とう／＼

嬉しい方が勝を占めて終つた。猶三言四言話を

するうちに、民子は鮮かな華りのない元の元氣

になつた。僕は勿論愉快が溢れる……、宇宙

間に只二人きり居るやうな心持にお互になつ

たのである。やがて二人は茄子のもぎくらをす

る。大きな畑だけれど、十月の半過ぎでは、

茄子もちらほらしかなつて居ない。二人で漸く

二升許り宛を採り得た。

「まあ民さん、御覽なさい、入日の立派なこと」

民子はいつしか箆を下へ置き、兩手を鼻の先
に合せて太陽を拜んでゐる。西の方の空は一體
に薄紫にぼかした様な色になつた。ひた赤く
赤い許りで光線の出ない太陽が今其半分を山
に埋めかけた處。僕は民子が一心入日を拜むし
をらしい姿が永く眼に残つてゐる。

二人が餘念なく話をしながら歸つてくると、
背戸口の四つ目垣の外にお増がぼんやり立つ
て、口つちを見て居る。民子は小聲で、
「お増が又何とか云ひますよ」

「二人共お母さんに云ひつかつて來たのだから、
お増なんか何と云つたつて、かまやしない
さ」

一事件を経る度に二人が胸中に湧いた戀の
卵は層を増してくる。機に觸れて交換する雙方
の意志は、直に互の胸中にある例の卵に至大
な養分を給與する。今日の日暮は慥に其機であ
つた。ぞつと身振ひをする程、著しき微候を
現したのである。併し何というも二人の關
係は明治時代で極めて取りとめがない。人に見
られて見苦しい様なこともせず、顧みて自ら
疚しい様なこともせぬ。從つてまだ暢氣な
もので、人前を繕ふと云ふ様な心持は極めて
少なかつた。僕と民子との關係も、此位でお

終ひになつたならば、十年忘れられないといふ
程にはならなかつたらうに。

親といふものは何處の親も同じで、吾子をい
つまでも児供のやうに思うてゐる。僕の母など
も其一人に漏れない。民子は其後時折僕の書室
へやつてくるけれど、餘程人目を計らつて氣ぼ
ねを折つてくる様な風で、いつきても少しも落
着かない。先に僕に厭味を云はれたから仕方な
しにくるかとも思はれたが、それは間違つてゐ
た。僕等二人の精神狀態は二三日と云はれぬ
程著しき變化を遂げてゐる。僕の變化は最も
甚しい。三日前には、お母さんが叱れば私が
科を背負ふから遊びにきてとまで無茶を云うた
僕が、今日には逆でもそんな譯のものでない。民
子が少し長居をすると、もう氣が咎めて心配で
ならなくなつた。

「民さん、又お出でよ、餘り長く居ると人がつ
まらぬことを云ふから」

民子も心持は同じだけれど、僕にもう行けと
云はれると妙にすねだす。

「アレあなたは先日何と云ひました。人が何
と云つたつてよいから遊びに來いと云ひはしま
せんか。私はもう人に笑はれてもかまひませ
んの」

困つた事になつた。二人の關係が密接する
程、人目を恐れてくる。人目を恐れる様になつ
ては、最早罪惡を犯しつゝあるかの如く、心も
おど／＼するのであつた。母は口でこそ、男も
女も十五六になれば子供ではないと云つても、
それは理窟の上のことで、心持ではまだ二人
人を丸で児供の様に思つてゐるから、其後民子
が僕の室へきて本を見たり話をしたりしてゐる
のを、直ぐ前を通りながら一向氣に留める様子
もない。此間の小言も實は娘が言ふから出た
まででほんたうに腹から出た小言ではない。母
の方はさうであつたけれど、兄や嫂やお増な
どは、盛んに謔言をいうて笑つてゐたらしく、村
中の評判には、二つも年の多いのを嫁にする氣
かしらんなどと專いうてゐるとの話を。それや
これやのことが薄々二人に知れたので僕から言
ひだして當分二人は遠ざかる相談をした。

人間の心持といふものは不思議なもの。二
人が少しも隔意なき得心上の相談であつたのだ
けれど、僕の方から言ひ出した許りに、民子は妙
に鬱々込んで、丸で元氣がなくなり、悄然として
ゐるのである。それを見ると僕もまた溜らなく
氣の毒になる。感情の一進一退はこんな風にも
つれづれ危くなるのである。兎に角二人は表面

だけは立派に遠ざかつて四五日を経過した。

陰曆の九月十三日、今夜が豆の月だといふ日の朝、露霜が降りたと思ふほどつめた。其替り天氣はきら／＼してゐる。十五日が此村の祭で明日は宵祭といふ譯故、野の仕事も今日一渡り極りをつけねばならぬ所から、家中手分けをして野へ出ることになった。それで甘露の恩命が僕等兩人に下つたのである。兄夫婦とお増と外に男一人とは中稻の刈残りを是非刈つて終はねばならぬ。民子は僕を手傳ひとして山畑の棉を採つてくることになった。これは固より母の指圖で誰にも異議は云へない。

「マアあの二人を山の畑へ遣るツて、親といふものはよッぽどお目出度いものだ――奥底のないお増と意地曲りの嫂」とは口を揃へてさう云つたに違ひない。僕等二人は固より心の底では嬉しいに相違ないけれど、此場合二人で山畑へゆくとなつては、人に顔を見られる様な氣がして大に煩りが悪い。義理にも進んで行きたがる様な素振りは出来ない。僕は朝飯前は書室を出ない。民子も何か地圖々々して支度もしせぬ様子。もう嬉しがつてと云はれるのが口

惜しいのである。母は起きてきて、「政夫も支度しろ。民やもさつきと支度して早く行け。二人でゆけば一日には樂な仕事だけれど、道が遠いのだから、早く行かないと歸りが夜になる。成るだけ日の暮れない内に歸つてくる様によ。お増は二人の辨當を拵へてやつてくれ、お菜はこれ／＼の物で……」

まことに親のこゝろだ。民子に辨當を拵へさせては、自分のであるから、お菜などはロクな物を持つて行かないと氣がついて、ちやんとお増に命じて拵へさせたのである。僕はズボン下に足袋裸足麥藁靴といふ出で立ち、民子は手指を佩いて股引も佩いてゆくと母が云ふと、手指許り佩いて股引佩くのぐ／＼してゐる。民子は僕のところへきて、股引佩かないでもよい様にお母さんにさう云つてくれと云ふ。僕は民さんがさう云ひなさいと云ふ。押問答をしてゐる内に、母はき／＼つけて笑ひながら、「民やや町場者だから、股引佩くのは極りが悪いかい。私は又お前が柔かい手足へ、茨や薄で傷をつけるが可哀想だから、さう云つたんだが、いやだと云ふならお前のすきにするがよいさ」

それで民子は、例の襷に前掛姿で眞草履

といふ支度。二人が一斗笠一個宛を持ち、僕が別に番二ヨ片籠と天秤とを肩にして出掛ける。民子が跡から菅笠を被つて出ると、母が笑聲で呼びかける。

「民や、お前が菅笠を被つて歩くと、丁度木の子」
が歩くやうで見つともない。網笠がよからう。新らしいのが一つあつた筈だ――

稻刈連は出てしまつて別に笑ふものもなかつたけれど民子はあわてて菅笠を脱いで、顔を赤くしたらしかつた。今度は網笠を被らずに手に持つて、それぢやお母さんいつてまゐりますと挨拶して走つて出た。

村のものらも彼はいふと聞いているので、二人揃うてゆくも人前恥かし、急いで村を通り抜けようとの考から、僕は一足先になつて出掛ける。村はづれの坂の降口の大きな銀杏の樹の根で民子のくるのを待つた。こゝから見おろすと少しの田圃がある。色よく黄ばんだ晩稻に露をおんで、シツトリと打伏した光景は、氣のせみか殊に清々しく、胸のすくやうな眺めである。民子はいつの間に來てゐて、昨日の雨で洗ひ流した赤土の上に、二葉三葉銀杏の葉の落ちるのを拵つてゐる。

「民さん、もうきたかい。此天氣のよいことど

うです、ほんとに心持のよい朝だね」

「ほんとに天氣がよくて嬉しいわ。このまア銀杏の葉の綺麗なところ。さア出掛けませう」

民子の美しい手で持つてると銀杏の葉も殊に綺麗に見える。二人は坂を降りて漸く究屈な場所から廣場へ出た氣になった。今日は大きいそぎで棉を探り片付け、さんく面白くことをして遊ばうなどと相談しながら歩く。道の真中は乾いてゐるが、兩側の田についてゐる所は、露にしとく濡れて、いろく草が花を開いてゐる。タウコギは未枯れて、水蕎麥など一番多く繁つてゐる。都草も黄色く花が見える。野菊がよろ／＼と咲いてゐる。民さんこれ野菊がと僕は吾知らず足を留めたけれど、民子は聞えなにかさつと先へゆく。僕は一寸脇へ物を置いて、野菊の花を一握り採つた。

民子は一町ほど先へ行つてから、氣がついて振り返るや否や、あれつと叫んで駆け戻つてきた。

「民さんはそんなに戻つてきないッだつて僕が行くものを……」

「まア政夫さんは何をしてゐたの。私びつくりして……まア綺麗な野菊、政夫さん、私に半分おくれッたら、私ほんたうに野菊が好き」

「僕はもとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

「私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振ひの出るほど好もしいの。どうしてこんなかと、自分でも思ふ位」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のやうな人だ」

民子は分けてやつた半分の野菊を顔に押しあてて嬉しがつた。二人は歩きだす。

「政夫さん……私野菊の様だつてどうしてですか」

「さアどうしてといふことはないけど、民さんは何がなし野菊の様な風だからさ」

「それで政夫さんは野菊が好きだつて……」

「僕大好きさ」

民子はこれからはあなたが先になつてと云ひながら、自らは後になつた。今の偶然に起つた簡単な問答は、お互の胸に強く興味に感じた。

民子もさう思つた事は其素振りだで解る。故まで話が迫ると、もう其先を言ひ出すことは出来な

い。話は一寸途切れてしまつた。

何と言つても切ない兩人は、今罪の神に懺弁せられつゝあるのであれど、野菊の様な人だと云つた詞について、其野菊を僕はだい好きだと云

つた時すら、僕は既に胸に動氣を起した位で、直ぐにそれ以上を言ひ出すほどに、まだくづうづうしくはなつてゐない。民子も同じこと、物に突きあたつた様な心持で強くお互に感じた時に聲はつまつてしまつたのだ。二人は暫く無言で歩く。

眞に民子は野菊の様な兒であつた。民子は全くの田舎風ではあつたが、決して粗野ではなかつた。可憐で優しくてきうして品格もあつた。厭味とか憎氣とかいふ所は爪の垢ほどなかつた。どう見ても野菊の風だつた。

暫くは黙つてゐたけれど、いつまで話もしないでゐるは猶をかしい様に思つて、無理と話を考へ出す。

「民さんはさつき何を考へてあんなに胸見もしないで歩いてゐたの」

「わたし何も考へてゐやしません」

「民さんはそりや謔だよ。何か考へごとでもしなくてあんな風をする譯はないさ。どんなことを考へてゐたのか知らないけれど、バさないだつてよいぢやないか」

「政夫さん、濟まない。私さつきほんとに考へ事してゐました。私つく／＼考へて情なくなつたの。わたしはどうして政夫さんよか年が多

いんでせう。私は十七だと言ふんだもの、ほんとに情なくなるわ……」

「民さんは何のこと言ふんだらう。先に生れたから年が多い。十七年育つたから十七になつたのぢやないか、十七だから何で情ないのですか。僕だつて、さ來年になれば十七歳さ。民さんはほんとに妙なことを云ふんだ」

僕も今民子が言つたことの心を解せぬほどの兒供でもない。解つてはゐるけど、わざと戯れの様に聞きなして、振りかへつて見ると、民子は眞に考へ込んでゐる様であつたが、僕と顔合せて極りわるげに遽に側を向いた。

かうなつてくると何をいうても、直ぐそこへ持つてくるので話がゆきつまつてしまふ。二人の内でもどちらか一人が、すこしほんの儘かでも押が強ければ、こんなに話がゆきつまるのではない。お互に心持は奥底まで解つてゐるのだから、吉野紙を突破するほどにも力がありさへすれば、話の一步を進めてお互に明放してしまふことが出来るのである。乍併奥底からおぼこな二人は、其吉野紙を破るほどの押がないのである。又茲で話の皮を切つてしまはねばならぬと云ふ様な、ハッキリした意識も勿論ないのだ。言はゞ未だ取止めのない卵的の戀であるか

ら、少しく心の力が必要な所へくると話がゆきつまつてしまふのである。

お互に自分で話し出しては自分が極りわるくなる様なことを繰返しつゝ幾時かの道を歩いた。詞敷こそ少なけれ、其詞の奥には二人共に無量の思ひを包んで、極りがわるい感情の中には何とも云へない深き愉快を湛へて居る。それで所謂足も空に、いふしか田圃も通りこし、山路へ這入つた。今度は民子が心を取り直したらしく鮮かな聲で、

「政夫さん、もう半分道來ましてせうか。大長棚へは一里に遠いつて云ひましたねい」
「さうです、一里半には近いさうだが、もう半分の餘來ましたらうよ。少し休みませうか」

「わたし休まなくとも、ようございですが、早速お母さんの間があたつて、薄の葉でこんなに手を切りました。ちよいとこれで結はへて下さいな」

親指の途中で疵は少しだが、血が意外に出た。僕は早速紙を裂いて結はへてやる。民子が兩手を赤くしてゐるのを見た時非常にかはいさうであつた。こんな山の中で休むより、畑へ往つてから休まうといふので、今度は民子を先に僕が後になつて急ぐ。八時少し過ぎと思ふ時分に大

長棚の畑に着いた。

十年許り前に親父が未だ達者な時分隣村の

親戚から頼まれて餘儀なく買つたのださうで、

畑が八反と山林が二町ほど茲にあるのである。

此邊一帯に高臺は皆山林で其間の棚が畑になつて居る。越石を持つてゐると云へば、世間體

はいいけど、手間許り掛つて割りに合はないといつて母が言つてゐる畑だ。

三方林で圍まれ、南が開いて餘所の畑とつづいてゐる。北が高く南が低い傾斜になつてゐる。母の推察通り、棉は末にはなつてゐるが、

風が吹いたら溢れるかと思ふほど棉は多んでゐる。點々として畑中白くなつてゐる其棉に朝

日がさしてゐると目ぶしい様に綺麗だ。

「まアよくゑんでること。今日採りにきてよい事しました」

民子は女だけに、棉の綺麗にゑんでるのを見て嬉しさうにさう云つた。畑の真中程に桐の

樹が二本繁つてゐる。葉が落ちて居るけれど、十月の熱を凌ぐには十分だ。茲へあたりの

黍穀を寄せて二人が陣どる。辨當包みを枝へ釣

る。天氣のよいのに山路を急いだから、汗ばんで熱い。着物を一枚づつ脱ぐ。風を懐へ入れ

足を展して休む。青きつた空に翠の松林、百

舌も何處かで鳴いてゐる。聲の響くほど山は靜かなのだ。天と地との間で廣い畑の眞中に二人が話をしてゐるのである。

「ほんとに民子さん、けふといふけふは極樂の様なりですね」

顔から頸から汗を拭いた跡のつや／＼しさ、今更に民子の横顔を見た。

「さうですねい、わたし何だか夢の様な気がするの。今朝家を出る時はほんとに極りが悪くて……嫂さんには變な眼つきで視られる、お増には冷かされる、私はのぼせてしまいました。政夫さんは平氣でゐるから憎らしかつたわ」

「僕だつて平氣なもんですか。村の奴らに逢ふのがいやだから、僕は一足先に出て銀杏の下で民さんをお待たせしたんでさア。それはさうと、民さん、今日はほんとに面白く遊ばうね。僕は來月は學校へ行くんだし、今月と十五日しかないし、二人でしみ／＼話の出来る様なことはないし、是から先は六づかしい。あはれつばいことぶふやうだけれど、二人の仲も今日だけかしらと思ふのよ。ねい民さん……」

「そりやア政夫さん、私は道々それ許り考へて來ました。私がさつきほんとに情なくなつてと言つたら、政夫さんは笑つておしまひなし

たけど……」

面白く遊ばう遊ばう言うても、話を始めると直ぐにかうなつてしまふ。民子は涙を拭うた様であつた。丁度よくそこへ馬が見えてきた。西側の山路から、がき／＼篋にさはる音がして、

薪をつけた馬を引いて頼冠の男が出て來た。能く見ると意外にも村の常吉である。此の奴はい

つか向うのお濱に民子を遊びに連れだしてくれと頼りに頼んだといふ奴だ。いやな野郎がきや

がつたなと思つてゐると、

「や政夫さん、コンチャどうも結構なお天氣ですな。今日は御夫婦で棉採りかな。洒落れてま

すね。アハ、ハ、ハ、ハ、」

「オウ常さん、今日は駄賃かな。大變早く御精が出ますね」

「ハア吾々なんざア駄賃取りでもして適に一盃やるより外に樂みもないんですからな。民子さ

ん、いやに見せつけますね。餘り罪ですぜ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

此野郎失敬なと思つたけれど、吾々も餘り威張れる身でもなし、笑ひとぼけて常吉をやり過

ごした。

「馬鹿野郎、實に厭なやつだ。さア民さん、始めませう。ほんとに民さん、元氣をお直しよ。そ

んなにく／＼おしでないよ。僕は學校へ行つ

たて千葉だもの、盆正月の外にも來ようと思へば土曜の晩かけて日曜に來られるさ……」

「ほんとに済みません、お前などして。あの常さんと男、何といふいやな人でせう」

民子は遠掛け僕はシャツに肩を脱いで一心に探つて三時間許りの間に七分通り片づけてし

まつた。もう跡はわけがないから辨當にしようといふことにして桐の蔭に戻る。僕はかねて用意の水筒を持つて、

「民さん、僕は水を汲んで來ますから、留守番を頼みます。歸りに『えびづる』や『あけび』をうんと土産に探つて來ます。」

「私は一人で居るのはいやだ。政夫さん、一所に連れてつて下さい。さつきの様な人にでも來られたら大變ですもの」

「だつて民さん、向うの山を一つ越して先ですよ、清水のある所は。道といふ様な道もなく、それこそ茨や薄で足が疵だらけになりますよ。

水がなくちや辨當が食べられないから、困つたなア、民さん、待つてゐられるでせう」

「政夫さん、後生だから連れて行つて下さい。あなたが歩ける道なら私にも歩けます。一人で

茲にゐるのはわたしやどうしても……」

「民さんは山へ來たら大變だゝッ兒になりましてネー。それぢや一所に行きませう」

辨當は棉の中へ隠し、着物はてんでに着てしまつて出掛ける。民子は頻りに、にこ／＼してゐる。端から見たならば、馬鹿々々しくも見苦しくもあらうけれど、本人同志の身にとつては、其のうちにき押問答の内にも限りなき嬉しみを感ずるのである。高くもないけど道のなれ所をゆくのであるから、笹原を押分け樹の根につかまり、崖を攀づる。屢々民子の手を採つて曳いてやる。

近く二三日以來の二人の感情では、民子が求めるならば僕はどんなことでも拒まれぬ、又僕が求めるなら矢張りどんなことでも民子は決して拒みはしない。さういふ間柄でありつゝも、節くまで臆病に俯くまで氣の小きな兩人は、嘗て一度も有意味に手などを採つたことはなかつた。然るに今日は偶然の事から屢々手を採り合ふに至つた。這邊の一種云ふべからざる愉快な感情は経験ある人にして初めて語ることが出来る。

「民さん、茲までくれば、清水はあすこに見えます。是から僕が一人で待つてくるから茲に待つて居なさい。僕が見えて居たら居られるでせう」

う」

「ほんとに政夫さんの御厄介ですわね……そんなにだゝを言つては濟まないから、茲で待ちませう。あらア野葡萄があつた」

僕は水を汲んでの歸りに、水筒は腰に結びつけ、あたりを少し許り探つて、あけび四五十と野葡萄一もくさを探り、龍脈の花の美しいのを五六本見つけて歸つてきた。歸りは下りだから無造作に二人で降りる。畑へ出口で僕は春蘭の大きいのを見つけた。

「民さん、僕は一寸『アックリ』を掘つてゆくから、此『あけび』と『えびづる』を持つて行つて下さい」

「『アックリ』で何に。あらア春蘭ぢやありませんか」

「民さんは町場もんですから、春蘭などと品のよいこと仰しやるのです。矢切の百姓なんぞは『アックリ』と申しましてね、鞍の藥に致します。ハ、ハ、ハ、」

「あらア口の悪いこと。政夫さんは、けふはほんとに口が悪くなつたよ」

山の辨當と云へば、土地の者は一般に樂みの一つとしてある。何か生理上の理由でもあるかも知らんが、兎に角、山に仕事をしやがてたべ

る辨當が不思議とうまいことは誰も云ふ所だ。今吾々二人は新らしき清水を汲み來り母の心を

籠めた辨當を分けつゝたべるのである。興味の尋常でないいは言ふも愚な次第だ。僕は「あけび」を好み民子は野葡萄をたべつゝ暫く話をする。民子は笑ひながら、

「政夫さんは鞍の藥に『アックリ』とやらを採つてきて學校へお持ちになるの。學校で鞍がきれたらをかしいでせうね……」

僕は眞面目に、

「なアにこれはお増にやるのさ。お増はもう疾に鞍を切らしてゐるでせう。此間も湯に這入る時にお増が火を焚ききて非常に鞍を痛がつてゐるから、其内に僕が山へ行つたら『アックリ』を採つてきてやると言つたのさ」

「まアあなたは親切な人ですことね……お増は蔭日向のない憎氣のない女ですから、私も仲よくしてゐたんですが、此頃は何となし私に突き當る様な事はかし言つて、何でもわたしを憎んでゐますよ」

「アハ、ハ、それはお増とんが焼餅をやくのでさ。つまらんことにもすぐ焼餅を焼くのは、女の癖さ。僕がそら『アックリ』を採つていつてお増にやると云へば、民さんがすぐに、まアあなた